
水の都の乙女

姫青

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

水の都の乙女

【NZコード】

N5168Y

【作者名】

姫青

【あらすじ】

チートな兄姉をもつ主人公が異世界トリップしちゃうお話。目が覚めたら……お城ですね、此処。平凡な女子高校生が男装させられたり、乙女になつたり……つてお兄ちゃん、お姉ちゃん！？なんで此処にいるんですか！？木佐原兄妹の異世界トリップ物語、末っ子編スタートです！＊逆ハー風味の恋愛ファンタジーになる予定です。

プロローグ・騎士と聞いて想像するものはなんですか？

ぼてり・・・と鈍い音を響かせそしゃくするはずであつたみかんがコタツの上に落ちる。

「開いた口が塞がらない」とは「のことだと実感する。

11月27日土曜日9時27分。

クリスタルヒ シ君の某番組を見ていた私、木佐原希は声を大にして叫んだ。

「さつさと引退しろ！…」

ビシッと人差し指をテレビに向けのけぞつてみせる。

「うつさい」

人の感情を無視して間髪いれずに投げつけられる姉の冷たい声に少し苛立ちながらも口をつぐむ私。

うん、だつてさ。文句なんていつてみ？

分殺ですよ。分殺。

多分秒殺もできるだらうけど、じりじりと苦しめるのが好きなお姉様

断言しよう、あなたはどうだと。

経験者にはわかるのです。

あの時にっこり笑顔は氷の女王様のものだつたと…！

そしてそこで口を開けて寝ているお兄様？

もともとはあなたのせいですよ…！？

いくら顔がよくてもあの時のことは一生忘れないからね…

この桁外れ兄姉めつ！

容姿端麗、頭脳明晰、と、まあいわゆるチートですよ。この一人は。

ちょっと、過去の事がフラッシュバックしたが
まだ、熱はおさまらないので声には出さず脳内で批判大会をはじめ
る。

（みなさん、「騎士」と聞いて想像するのはなんですか？
ええ、はい。そうですね、イケメンですよね？細マッチョですよね？
わかります、わかります。
世の乙女はそれを望んでいんです。
決して、お腹の出ている老人を望んでいのではありません。
ハゲもお断りなのです。
そりなんです。

……だから早く引退してやーーの孫にその服させやがれ、おっせん！
（）

思わず人差し指をビシッとテレビに向けると、またしても横から
「邪魔」
といつ氷の女王様ボイスが聞こえてくる。

しまつたとおもい、横田でちぢぢりと姉の横顔を伺つ。
もちろん警戒度MAXで。
我が家はキレると物をなげてくる。
ケータイ、消しゴム、ティッシュ、HTセトラ、HTセトラ、……。
幸い、今まで凶器となるものはなげこなかつたけれど。
しかしチートな姉だ、たとえティッシュでも皮膚が赤くなるくらい
にはなる。

警戒といつ名のオーラをだし神経をとぎすましている私を姉は一瞥し、

「鯉にエサあげてきて」

と冷たく言い放つた。

……了解です、ボス。

先ほど落としてしまったみかんを口にまおりいれ
掛けてあつた羽織りに袖を通して、庭に出る。

澄んだ夜空に浮かぶ月に照らされた日本庭園をかけると
その足音が聞こえたのか池の鯉がぴちゃぴちゃと跳ねる。

「…………ありがたくお食べー、私がこの寒い中、」飯もつてきてあげ
たんだから」

エサを投げ入れると争奪戦が始まった。
その様子を近くで膝を抱えて観察する

(あいつ……)

ふと目に付いた一匹の錦鯉。似ている。

誰に?もちろん騎士団のハゲでデブなおっさんに!…)

一度冷めていた苛立ちがふつふつと沸き起る。

（あれはなによなー、騎士団とか言われたら期待しちゃうじやん。
……平均年齢高すかなんだよ。）

「はあ～～～」

深く長いため息をつく。

れつも見ていた某番組でとある紳士の國の騎士団が紹介されていた。
私も世の乙女の一員であるからして、騎士団とやらで期待していた。

そうして一人ぶつくさ文句を言つていた私は気づかなかつた。

背後には人がいることに。

そして、その人の手が私に伸びていることに。

ぱっしゃーん

盛大な音と共に私は池に落ちた。

否、落とされた。
何者かによつて。

プロローグ・騎士と聞いて想像するものはなんですか？（後書き）

はじめで読んでいただきありがとうございます。

初めての作品ですが、お付き合いいただければ幸いです。

第1話・生活リズムは崩せない（前書き）

やや不器用な筆ですが、ご注意ください。

第1話・生活リズムは崩せない

十一月の水は冷たい。

冷たいというより小さい針で刺されているかのような痛さだ。
中学生のとき水泳部に所属していたのですでに体験済み。
プール掃除のときに、緑色のプールに突き落とされるなどは毎年恒
例の儀式ともいえる。

あれは春先だつたけど、気温的には変わらないと思つ。

目の前を錦鯉が通り過ぎる。

ゆらりとゆれる尾びれと共に泡がキラキラ光つて……

「ぶつわっは――――――」

勢いよく水から顔を出す。

死ぬ、死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ！！

必死に灰に酸素を送り込むと同時に顔についた水をはらう。
池の水なんてどんな微生物がいたものかわかったものじゃない。

「ふー、ふー」

ザバツと池からあがる際に、水を吸つて重くなつた服が体に絡みつ
く。

(寒い……)

あまりにも冷たかったので、外の気温が暖かく感じる。
指先がもう氷のように冷たい。膝を折り地面に座り込む。
体を大量の水滴がつたつて地面に落ちる感覚が気持ち悪い。
腕を池のへりにあずけまぶたを閉じる。

(つかれた……)

ふいに、タオルで体を包まれる。
きつとお姉ちゃんが気づいてくれたのだろう。
柔らかい感触にほつとする。
全身を包まれると力強い腕に持ち上げられた。
やがて聞こえてきた規則正しい鼓動の音を聞きながら、眠りに落ちた。

「……………、アーラー、どうですか？」

目を覚ました私の前に飛び込んできたのは、天蓋付きベッド。そして、なんとも愛らしい家具たち

……たしかに、私の部屋にはベッドがおいてあるし、可愛いものも少しある。

しかし！だ、我が家は築120年の日本家屋でござりますよ！！

写真でしかみた」とありますから――！

明らかに自分の部屋ではない光景に頭の中が混乱する。

(……夢……?)

手の甲でぐいぐいと田元をこする。

つこでに伸びもして、眠っていた神経たちを呼び起こす。

(…………変わらない……)

何度も、田をまたたいても、景色は一向に変わらない。
むしろ、クリアに広がる景色が「現実」なのだと呼び起こした神経
につたえかけている。

手に触れるシーツの感触が実際のものだと理解すると、体の奥がな
ぜかむずむずする。

「…………」

むすむす感に堪えられず、ベッドからおじる。
辺りをみまわすと扉が三つあり、明らかに装飾の少ない一つに近寄る。

近いほうのドアノブをまわし、扉を開ける。

中には洗面台とお風呂があった。
そしてその隅のガラス板の向こうには、洋式トイレが佇んでいた。

「よしつー。」

思わず声をあげる。

異世界トロップ一日田の朝の出来事。

第1話・生活リズムは崩せない（後書き）

希ちゃんは、朝起きたらすぐトイレ派です。
こんなに図太くなるはずじゃなかつたんですが・・・

第2話・寝起きせぬボーッとしているものです。(前書き)

() 内は希ちやんが意識して考へてる事です。

第2話・寝起きはボーッとしているのですー。

「ふー、落ち着いたー。」

顔も洗つて、すつきり度100%で最初の部屋に戻る。やつぱり、そこはお姫様チックなお部屋だつたけれどさつきよりは気分も落ち着いて、冷静に頭が働きそつ。

もう一度しつかりと部屋をぐるりと見回すと大きな出窓があった。

(……あれはー！)

小走りで、窓に近づく。

(ああ、なんといふことでしょう、……この出窓…
ピーターパンのウーンディのお部屋にそつくりです
この大きさといい、段になつて腰掛けられるのといい、何よつもこのクッションのふかふか加減！！

私の想像そのまんまではありませんかー！)

ビィフォアー フターのアナウンサーばかりの解説で出窓をほめたたえる。

右手を伸ばしてクッションの感触を堪能するだけではたりなくなつて、そつと薄いピンクのクッションで覆われた段に腰掛ける。クッションの弾力が私の体重を軽く押し返しながらも、やさしく包み込んでくれる。

何コレ！？すゞぐ心地いいです！

純日本家屋の我が家には、ソファなんてものなかつたし、ましてや出窓なんておしゃれなものなかつたもんない。

我が姉様の「体が痛いからベッドがいい」発言により、数年前からベッドが導入されたけど、二 リのパイプベッドは軋むので寝返りを打つたびにキイキイと鳴つた。

夜、廊下を歩いているときに、誰かの部屋からキイキイ音が漏れてきたときは心臓が止まるかと思つた。

夜中の小さな音が怖い。これぞ日本家屋あるあるだ。

視線を窓の外に与すと広い庭園が見えた。

噴水を中心に迷路のようにならがつていてる。

緑の迷路には色鮮やかな花も咲いていて、パツと庭を明るく見せてる。

心なしか小鳥のさえずりも聞こえてくる気がする。

（あの花、薔薇かな？薔薇だといいな。

やつぱりこんなに豪華なお庭には薔薇が似合つもんね。

…ホント、すごいな…なんかお城みたい…）

小さいころはお姫様とかが大好きで、よくお姉ちゃんに遊んでもらつたなあと幼き日を思い出すと笑みがこぼれた。

（まあ、たいてい私が侍女役だったけどね……）

口元の笑みが苦笑にかわる。

視界にキラキラと光る取つ手を確認する。

（窓、開くかな……？）

田の前にある金具に手を伸ばす。
つまみをつまんで回すとカチャつと音がした。
取つ手を握つてぐつと押してみるがびくともしない。
たてつけでも悪いのかな。
さらに力をいれて押してみるが結果は同じ。

これは……「押してだめなら呑こてみろ」つてやつー?
だとしたら、ものすごく恥ずかしいんだけど……。
十回くらい押してたよ……。

「ぐつぐつとビビを鳴らし、勢によく手前に引く。

パキッ

小さな音と同時に感じる浮遊感。

直後にどんづと背中に痛みを感じる。

卷之二

背骨打つた・・・。

背中をさすりながら、手の中のものをみて青ざれる。

— — — — —

壊した! 壊れた! 壊した!!!! 壊しなやったよ!!!! ビーしょつーーーっぱりハレってあれですか。

われてますからね！

ない

お城？

弁償?
誰に?

ああああああああ――――――――――――

(そ う だ よ 、 こ こ 何 处 で す か ！ そ し て こ の 格 好 な ん で す か ？)

思い出した現状に混乱しながら自分の着ている服を見下ろす。
リボンとフリルたっぷりの白のワンピースつて！
手がじわじわと嫌な汗で湿つてくる。

(落ち着け！冷静に考えろ、自分！！)

数十秒思案したのち信じられない結論に達したが、まだ決め付けるのは早い……よね？

（大丈夫、ここがどこかもうすぐわかるはずーー）
ぐっと右手を握り締める。

ノンノン

ガチャ

ノックの音に続きドアノブが回される。

扉を開けて入ってきたのは、茶髪の男だった。

思わず目を見開く。

(どうしよう……。全然わづかんない……)

希の考える日本ならば黒髪、王道なら金髪論は通用しなかつた。

第3話・初対面の人との距離は大切です（前書き）

今回は短めです。

第3話・初対面の人との距離は大切です

扉を開けて入ってきたのは、茶髪の人でした。

目を見開いている私をみて何を思ったか男も目を見開く。
何だらうと、びかしむと、すぐさま男は同じような表情をする。

……真似してるんですか？

いや、馬鹿にしてるのか？

じつとみつめてくる視線に耐えられず頭をさげるとなぐに

「大丈夫ですか！？」

と男が駆け寄つてくる。

男はさつと方膝立ちになり、左手に壊れた（壊した）取つ手を握り、正座をしている私の腰と首の後ろ辺りをしつかりと支える。腰に回される手にびくりとしてしまい、思わず上体が前に倒れる。前にいた男の肩にあごをのせる形になってしまった。

男の体が一瞬びくりと動いたと思つたら、なぜか今までよりもしつかりと抱えられる。

…………あれ？なにこれ、なんか体が包まれてる感がするんですけどー？

これって、別の言い方をすれば抱きしめられてるともいいませんでしたっけえ！！

心の中で悲鳴をあげる。

バツと体を後ろへそらすとハシバミ色の瞳と視線がぶつかる。
距離にして約10㌢。

近くでみる男の顔立ちに口を鯉のよつにパクパクとせせる。

……あ、ああ……い、イケメンじやあありますんかー！

少し切れ長の目、薄めの唇、コーヒー色の髪の毛は少し短めだった。
なんといってもキメの細かい肌は、黄色人種でも、白人ともすこし
違う色をしていた。

そのことが、私の推測を後押しする。

「顔が赤いですね……風邪でもひかれましたか？」

声をだせない私をよそに男は手を私のおでこにそっとあてる。

いいいいいやややややややああー

叫びたい衝動を必死にこらえ主張する。

「だつ、大丈夫です！！」

男の手を振り切り、さつと立ち上がり数歩後ろへ下がる。
男も立ち上がりせつかく広げた距離を詰めながら心配そうに声をかけてくる。

「熱はなさそうですが、顔が赤いのは心配ですね」

「いっ、いえ！全然いりません、心配！！」

なんか文法がおかしくなったけどこっちは必死なんです！
平凡な女子校生にあなたの顔は破壊力ありすぎなんですよーー

近づいてくる男に顔の前で手をふって、いりませんアピールをする。
そしてまた数歩下がる私に男の目尻が少し下がったように見えた。

(……ん？笑われた？)

ちょっとむつとして見ると、男はむつと変わらず心配そうな顔をしていた。

(……気のせいが……)

第3話・初対面の人との距離は大切です（後書き）

急いで書いたので手直すかもしれません。

第4話・つぶやめは無視されたのが世の常です（前編）

途中から視点が変わります。

第4話・つぶやきは無視されるのが世の常です

「失礼します。」

目の前の男から数歩下がった瞬間かわいい声とともに16歳くらいの女の子が入ってきた。

しゃ もしかして見てて入りこむかた可能性とかもある？
ああああ、あれはちょっとした事故ですから！

ですか？

ちらりと男を盗み見ると少女の方に振り返り、私の前に来るようになながしていた。

少女は足早に近づき男の横に並ぶ。エメラルドクリーンの瞳が部屋に差し込む光できらきらと輝く。

少女が横に並ぶと、男は流れるよくな仕草で私の手をとり、ちゅーと小さく音を立てキスをした。

この流れでしますか普通！？

二、ハチの巣の裏の木の上に、

エメラルドグリーンの瞳がすうっと細められるのが視界に入った。

こんなこと普通の人にやられたら吐き気がするだろう。

それでも、いきなりで意味不明な行動があまりに自然で様になつて
いるから、むしろカッコいいとさえ思つてしまつ。

イケメンって恐ろしい。

「ご挨拶が遅れました。クイスピス国騎士団、第一部隊副隊長のシ
ュゼ・ハクス・アーベルです。」

男 シュゼは顔を上げにっこりと告げた。

「騎士団? つてかクイスピス国つて言つた?」

シュゼが後ろに一步下がると、今度は女の子がきれいな仕草でお辞
儀をする。

腰まで届く蜂蜜色のふわふわカールヘアがゆれる。

「今日から侍女としてお世話をさせていただきます、ゼラ・リース・
クラウドです。」

にっこりと微笑むゼラは天使みたいにかわいい。
けど、そろそろ真面目に確認したいんです。

がんばってゼラの天使の笑みを真似ながら自己紹介をはじめる。

「木佐原希です。あの、一つ確認したいんですがここって日本「異
世界です。」……なんですか。」

「それって、異世界召喚とかいつの「ではないですよ。」……です
か。」

笑顔で私の疑問を全否定してくるシュゼ。
しかもわざわざ被せて。

「そう、ですか……。」

力ない返事を返す私。

「あら？ 驚かれないんですか？」

不思議そうに私を見るゼラに苦笑いを返す。

「ええ、まあなんとなくそういうじゃないかと思つてましたから……。」

いやや、信じたくなかったけどね？

言葉をかぶせてくるくらいの勢いで全否定されたら、現実として受け止めるしかないでしょう……。

ショックで放心状態の私の事は無視して話は進む。

「そうですか。ではまずは着替えていただきましょう。ゼラ。」

シユゼがゼラに声をかけるとゼラが私をベッドの方へとうながす。ゼラは私をベッドに座らせてるとチチチチと私の前ボタンをはずしていく。

ピッピー、イエローカード

「ちよつ、いや、ひとりで着替えるよーー？」

危ない、うつかり脱がされるとこでした。

（お決まりだから予想はしてたけど、服くらい着替えられるし、だいたいショゼの前では脱げないって！）

ちりりとショゼを見やるとあくまでも部屋から出て行ったところだった。

行動が早くて何よりです。

「いえ、コレが私の仕事ですし、着方がわかりませんでしょ？恥ずかしがらないで下せー。」

困ったように笑う姿はやっぱり天使のもので、うなずきながらなる。しかし、ここで負けてはいけない。いくらなんでも、自分より年下の子に着替えを手伝つても「うんて氣分が悪い。

「で、でも、見たところパンツスタイルだし、大丈夫だよーだからゼラちゃんは外で待つて？」

「こはゆずらない！…といった顔で言つとしぶしぶながらも了承してくれた。

ドレスならともかく、パンツなら大丈夫だらう。

「……わかりました。ですが、わからないうところがあつたらすぐ呼んでくださいね。あと、どうかゼラとお呼びください。」

そう言い残すと手に持つていた服を私に手渡して、ゼラは扉を開け

て出て行つた。

（異世界か……）

まさかそんな事が本当で、しかも自分に起つことはね……）

手渡された服に着替えながら、クラスで流行つていたラノベを思い出して微笑する。

（……まあ、がんばつてみますか……）

出窓からこじこじむ光がキラキラとよく晴れた青空を背景に光ついていた。

「でも……私、もじれるんだよね？」

つぶやいた言葉はぽかんと開いた口に吸い込まれた。

「あなた、いつからそんなキャラになつたの？」

ゼラは廊下に出ると、壁に寄りかかっている幼馴染に声をかけた。

「や、だつてあの子の反応かなりおもしろいじゃん。思つてることがすぐ顔に出るし。」

さつまとは打つて変わつて碎けた調子で答えたのは　シユゼだつた。

「確かに私も、こんな小さい子にお世話をしてもうりつなんて…つていうような顔されたけど、今日からは私のお仕えする方なんだから、からかわないでほしいわ。」

ふうっと頬を膨らます仕草はゼリから見ても幼い少女にしかみえない。

「おい。26にもなる女がそんな事するなよ。」

シユゼはやれやれといった表情で首を軽く揺らす。

「あら、でもキサハラ様は自分より年下だと思つてるわよ。」

「その見た目で今までどれだけの奴が騙されてきたか……全く、恐ろしい隊長だぜ。」

クイスピス国騎士団、第一部隊隊長、ゼラ・ロース・クラウド。

これが彼女の本当の肩書きだった。

「失礼なことを言つたのね。……で、言われたとおり彼女に渡してきただけど、いつたいどういういつもりなのかしら。あの人は。」

「ああ、あー早く出でこないかな。」

うーんと考へ込むゼラをよそにシユゼがくつくつと楽しそうに笑つ。

迎えにいつた部屋には16歳くらいの少女がうずくまつていた。
自分を見るなり見開かれた瞳は漆黒だった。

夜の王を連想させる黒真珠のよつた瞳と、上質な綿のよつた
艶やかな黒髪に思わず目を見開く。

直後、少女の眉間にしわがより、がっくつとつんだれる。

正直、あせつた。

少女の目が覚めた事は10分以上前に知つていた。
だが、そう深く考へずのんびりとここまできてしまつた。
彼女を守るのが、与えられた自分の役目。
もし彼女が慣れないもので怪我をしてしまつたといつなら……それ
は自分の責任だ。

急いで駆けつけ体を支えると、トンツと体を預けてきた。
その行動があまりに無邪氣で愛らしく感じられた。

指に絡まる黒髪のやわらかさに優しさを感じ、腕の力を強めてしまつ。
そつと少女の頭をなでようとすると、バツと体をそらせ目をまん丸

に見開く。

今にも消えそうな儂をまとつていながりもその瞳には強い光が宿つていた。

その瞳をじつとみつめていると、急に何か言いたげに口を開けたり閉じたりしはじめた。

その顔は真っ赤だった。

照れているのだとわかると少し意地悪してみたくなった。

おでこに手をあててみれば急に立ち上がり、大丈夫だと主張された。

おもしろい。

ちょっとからかってみればすぐ思つていいことが顔にでてあせつているのが見てとれる。

せうこには一步近づけば一步下がるしまつ。

わざわざまでの儂さはどこへいったのか、微塵も感じられなかつた。

必死に間をとつていた少女は次はいつたいどんな反応をみせてくれるのか。

「はやく、着替え終わらないかなー。」「さく、つぶやく。

第5話・いじめを受けたら白旗を

口がぽかんと開く。

ああ……今日で何回目かの動作。

これはあいつと癖になつてゐるなと思ひながら自分の格好をもう一度確かめる。

白のシャツに、チョックのベスト、ネクタイに黒っぽいのジャケット。

そしてパンツはパンツでもブーツの中に入れるアレ。

なんだかうね、この英國紳士感?

「お手をどうぞ、レディ? ちゅつ」 みたいな事やりそつた感じ?

やつぱりこれつてさ、あれだよね。

いじめ?

いじめですかね? だつてさ、だつてさー?

さつきまで私が着てた服ワンピースだし！た、体型だつて平均以上ですよ？

嘘です。『めんなさい。よくて平均です。

どつちこじてもさつときまであきらかな女子服着させられてたんだから、これはもうこじめ決定ですか……。
だつて『ん、どつからどつみても男物だもん……。

部屋の隅においてあつた姿見で自分の姿を確認し、肩を落とす。
なんでだらう、わっかのワンピースよりもこっちの方が似合つて、
る気がするのさ。

二重のぱつちりとした目と抜いたり画いたりしていな形のよい眉
がりりしく、中性的な顔にみせているのかもしけない。
それでもやつぱりこの格好に長い髪は似合わないので部屋において
あつた白いリボンド髪の毛を後ろで結ぶ。

（……男だ……）

姿見に映つていたのは、ジョンナルマンといつ言葉が似合つて
青年だつた。

（……すいここれなら学祭で男子役やつてもよかつたかも……）

女子高の学園祭での演劇の出し物はたいてい恋愛ものなわけで、必然的に男装する生徒がでてくるわけだ。

いまどき珍しい胸下まで伸びる黒髪という容姿から主役に抜擢されたのはいいが、浮かれて家族に話す必要はなかつた。

（……いや、やつてたら絶対に殺されてるな…）

がつくりとうなだれていた顔をあげると、もつ着替え始めて30分も経つていた。

一人を廊下に出したといつゝとはすなわち30分廊下に待たせいることになる。

（急がなきや…）

身なりをさつと整え、ベッドの上に散らかしたリボンの束をまとめ、一人が待っている廊下へ続く扉を勢いよく開けた。

「…………似合つていますね…。」

「ええ、とても…。」

飛び出してきた私の姿を見てうんうんと頷く一人。

えええ――――――

ああ……これも何回目?…

じゃなくて!そっちでしたか!

だつて私のこと女だとわかつて男物きせていじめてるなら

「ふん!あなたにはお似合いよ!」

「その貧相な体にはやはりその格好が合いますね。」

みたいなじわる発言がくるはずだからこの裏を感じられない賞賛
は……

男だと思つてたつて事ですね……。

……………ん?

それじゃあ、わざわざのワンピースは?女物を着せるつていういじめ
でしたか!?

結局、私の性別がどつちどもいじめられてるんじゃん……と脳内で
嘆きながら、ジャケットの胸ポケットから見える白いハンカチに手
を伸ばす。

ひらひらひら……

「……何しているんですか?」

シコゼがきょとんとしながら私の振つている白いハンカチに目を向ける。

「……降参です。すみません、言われたことはきちんとしますんでいじめないで下さー。」

「……ぼしょぼしょぼと告げる私にゼリフは大慌てで

「こじめてなんていませんよー。」

と詰む。

でもね、どうみたっていじめですよ。

「男装しこと山のならしますけど、山の山やり方は精神的なダメージが……。」

ですから……と続ける私の前でくつくつと笑い声が聞こえる。視線を上に向けると、シコゼがおかしそうに笑っていた。

「くつくつ……その服男物だとわかつてて着てきたの? あんた。しかも髪まで自分で結んでるし。」

そーですよ、わかつてましたよ、いじめだつて」とは……って、え?

「申し訳ありませんー！そつこいつもりで似合っているといったわけではないんですが……本当にキサハラ様がお綺麗で……。」
必死に謝罪をするゼラはやっぱりかわいい。でも、そんなことより聞き捨てならない言葉が……。

「……そんなキャラでしたつけ？」

ゼラの言葉を無視してシユゼに質問するのは気が引けるが……
許してくださいー！私の騎士に対するジーントルマンイメージが危機に陥っている気がするので！！

ゼラに視線だけで謝り、シユゼに視線を戻すとシユゼはこいつと上品な笑みを浮かべていた。
そして

「はじめまして。シユゼ・ハクス・アーベルです。」

ちゅつとリップ音をたて、私の頬にキスをした。

「つーーー！」

あまりの衝撃に背後に倒れこむようにして数歩さがる。

ゴッ

後頭部の痛みとともに遠ざかっていく意識のなかで、がっしりとした腕に支えられた気がした。

第5話・いじめを受けたら白旗を（後輩を）

急ぎ投稿なので誤字・脱字があるかもしれません。

第6話・お間違えに注意ください

寝返りを打とうとするべくわんとした痛みが後頭部から頸にかけて感じる。

（頭、打ったんだつた……。）

頬にあたる枕のカバーがさらりとしていて気持ちいい。
きつとゼラがベッドに寝かせてくれたのだろう。

（ゼラには後でお礼を言わなくちゃ。）

ベッドに運んでくれたのは気を失った自分を支えてくれた腕の持ち
主だろうがもとの原因是その人なわけで、お礼をいつつもりは毛頭
ない。

後頭部に感じていた痛みがひき、うつすらと目を開ける。
部屋に差し込む光があまり変わっていないからそんなに気を失つて
いたわけではないだ。

ただ一つ気になつたことがあつた。

このキラキラふさふさの物体なんですか？

何だらうとじつと凝視していると金色の物体X^{エックス}はもぞもぞと動き始め、ひっくり返つた。

ପାତା ୧୦

「ひつ！」

体をひくりと震わせ絶句する。

誰コレ、何コレビリの王子様ですか！！

「あはは、そんなに驚いた？」

金髪男は朗らかな笑顔をつかべ、頭、大丈夫？痛くない？と続ける。

「だ、大丈夫ですけど……どちら様でしょうか？」

見ず知らずの男と添い寝をしている状態にじきまきしながら聞く。

「ああ、僕？僕は、この国の「王子」…なにをしてらっしゃりますの…？」

金髪男の自口紹介を過ごで
が大声をあげる。
かせやりと扇を開けて入ってきたセミ

「あ、ゼラ！寝かしてくれてありが……」「

ゼットの方を向かへ、体を起し、お詫びの言ひ方をするが途中でとまぬ。

ん?今、王様のご子息の総称的なものが聞こえたんですけど

「王子様！？？」

バッと体を起こし金髪男を見る。

「うん、そう。王子様。」
にこにこと自分を指差す金髪男……もとい、王子様。

なんですよ――――――――?

確かには #ハゲ #金髪 ですし #ハゲ木 #緑髪発生中 ですけど！
なぜにここにいるんでしょ？

「いついらしたんですね？」

ゼラがベッド近寄りながら王子に尋ねる。

「さつきだよ。ゼラたちが廊下でじやれあつてたときには、ベッドから体を起こし、立ち上がりながら答える王子の顔は笑顔だった。

「申し訳ありません。」

だってそのときの王子様の笑顔は

……あなた本当に王子様ですか？

魔王様のものだった。

「ま、君たちに限つてそんなことは起きないと慰めながね。」
一応ね、と王子が朗らかに言えば肩に重くのしかかっていた真っ黒
なオーラが、一瞬にして消え去る。

なんなのでしょうか、今の魔王様オーラは……

唚然として、オーラと王子様をみぐらべてみると

「ああ、ちゃんと説明するからね。で、ショゼは生きてる？」
心配しないでといった顔で私を見る王子様にこくうと頷くが、また
しても気になる言葉が……

……生きてる？なんですかそれ……ショゼさんに何があつたんです
か私が倒れてた間に！

そろそろジジラをみると、ええまあ。と苦笑。

「ゼリちゃん?……なんで残念そうなんですかあー?」

「生きてる。トラブルがあつてレオの部屋まで連れて行けなかつたんだ。悪い。」

よたよたと部屋に入つてきたシユゼが生存宣言をする。

「ん、別にいいよ。僕の部屋でもじこでもたいして変わらないし。それより僕は、なんでこの子がシユゼを見て顔を赤くしてるのがしたいな。」

そう言われ、頬に手をあてれば熱をもつてているのが感じられる。

(ひやー、だつて、あんな事されればだれだつてこいつなるよーー)

三人の視線に耐えられず下を向く。

「い、いや別にあいさつをしただけで……。」

何でもないんだとわたわたするシユゼに沸々と怒りがこみ上がる。

(「別に」つて何ーあれば重大事件でしょーー乙女の純情をからかうなよーー)

シユゼをベッドから見上げた瞬間、再び空気が変わる。

あれ？なんだかひりの感じがわからも……

身に覚えのある感覚に首を回転させ王様を見ると

「とつあえず、朝」はんでも食べながらお話しようか。」

魔王様が再降臨していた。

第6話・お間違えに注意ください（後書き）

活動報告の方も見ていただければ幸いです。

* 追記*

すみません、話を追加しました。

第7話・感謝の気持ちをもつて?

「とつあえず、朝ごはんでも食べながらお話しようか。」

魔王様の再降臨にシユゼの顔が一気に青くなる。
地を這う黒く重たいオーラに一同動けなくなる。

……なんですか?この絶対に王子様にいらないスキル!
オーラで動けないとか意味わかりませんよ!?

口内で舌を回し、唾液でのどを潤わしてから口を開く。

「あ、そうですね。朝ごはんまだですし、王子様にいりこりう聞いた
い事もありますから。」

必死に王子様に話かける。

「だよね。じゃあゼラ、持ってきて。」

王子様の発言に時が動き出す。

温度が上昇したのを感じ、ホッと胸をなでおろす。

「かしこまりました。」

ゼラが一礼して、装飾の少ない扉に消えた。

！－消えた－－

消えた。本当にゼラは消えたのだ。取っ手に手を掛けたとたんパツ
ト。

いふなればハリーとかいう少年が赤毛の子に出会い、4と2分の3
番線を目指し壁に激突していくといったのと同じ現象が起こった。

「……ま、魔法？」

目を細め、部屋の隅の扉をじっと見つめながらつぶやく。

「あー、やっぱり君は魔法のない世界から来たんだね。」

右側から聞こえる王子様の声に横を向くと

ゼラが窓側の丸いテーブルに並んだ料理を取り分けていた。

……うそーん。

……ああしまつた、これではどうかのお祭り男と同じじゃないか

ただ呆然と目の前の出来事を眺める私に今度は左側頭上から声が聞

こえた。

「くつくつくつ…」

見上げればシユゼが耐えられないというよつて笑いをかみ殺していった。

ふちーん。

何笑つてんですか！－すみませんねえ、魔法をしらなくて…－
さぞおかしくみえたでしうね。凝視している反対側にお皿当ての
人がいるのに気がつかないという状況は…－

笑われた羞恥とイライラにまかせベッドから勢いよく立ち上がり、
その拍子にシユゼの足を思いつきりふんづけてやった。

…なにが悔しいって？「痛み？なにそれ、驚いただけだけど？」つ
てこうシユゼの表情にかな。

ずかずかと大股でテーブルにつく。その様子を口元に笑みを浮かべ
ながらみていた王子様も反対側の席に座った。

「いただきます！－

両手を合わせ手じかなスープを飲む。

ふわっと香る香りがどことなく「ーンスープを思い出させる。

「ゼラ…－」れすつじくおいしいよ。

顔を上げにっこりと微笑むと、よかつたですと微笑み返してくれる。
炒め物みたいな料理もおいしかった。

卵料理らしきものに手を伸ばすと、いつの間にか隣にいたシユゼが
お皿をひょいと持ち上げ取り皿に分けてくれた。

少しだけフンつと思う気持ちもあったがお礼を言つことは大切だ。

「ありがとうございます。」

顔を見上げると、シユゼの口端がちよこつと切れていたのが気についた。

「どうしたんですか？ 口。」

自分の口元を指差してみせる。

（私が倒れる前にはなかつたのに……

さつきのゼラの反応といい、王子様の生存確認といい、やっぱり何があつたんだ。気になる……。）

「ああ、……気にはすんな。それより、頭平氣か？」

悪い、と少し頭を下げて謝るシユゼに教えてくれないんだと思いつつもうん、と頷く。

「平氣です。でも私何にぶつかつたんですか？ 先がどうつてたよくな気がするけど……。」

あのとき自分の後ろには部屋へとつながる扉しかなかつたはずだ。

「それは、コレですわ。」

ゼラがすつと黒い塊を私に手渡す。

……天狗？

いや、アントニオ 木？

そつだきつとそつだ。

手渡された物は金属のよつな物でできてるお面だった。

「のによーんとしてるのってあ！」だよね。

……長いなあ！」……手のひら一個分くらいの長さあるナビー……。

まさか「コレが…ビザリをみるヒーベ」と頷く。

後頭部にクリティカルヒット

つてわけですか……

「……なんでこんな飾ってるんですか？凶器ですよ「コレ」。体験者として一応、危険性を教えておく。

「凶器どころか、魔よけなんだけど……。」

申し訳ないといった顔で王子様が教えてくれる。

魔よけなんですか「コレ」？

道を歩けば各々の家の扉にはコレが飾つてあるんですか！？

……怖いなこの国。

改めて魔よけを見ると子供がみたら大泣きするであろう顔をしてい

る。

じつと魔よけを見つめる私に何を思つたか誇らしげに王子様が教えてくれる。

「それは、君のためにつくらせた特製物だよ。」

「…………。」

「…………？」

「……あ、あいがとうござります。」

「うん。」

このときも希が心の中で思つた事は後に撤回するけれども。

第7話・感謝の気持ちをもつて? (後書き)

おまたせしました。

更新予定を活動報告の方に書いておくのだけ」確認ください。

第8話・感謝の気持ちをもつて(前書き)

基本設定です。

第8話・感謝の気持ちをもつて

「それで、あの、私この世界になんでいるんでしょうか？」
しっかりと王子様の方を向き、一番聞きたかった事を聞く。

「うーん。『じめん、わかんないだよね。』

……わかんない？

わかんないってなんですかそれ！？異世界トリップですよー！？もつ
といりいろあるでしょうが普通！！

私の眉間にしわがよるのを見た王子様はまあまあと話しだす。
「水の都って知ってる？」

何それ？とふるふると首を横にふる。

「そつか……。

あのね、この世界には精霊というものがいて、いろいろな加護を僕たちに分け与えてくれているんだ。気候やその地になる食べ物の量もこの精霊の種類や数によって変わるんだ。

そしてなぜか大陸の中心に位置するこのクイスピス国にはたくさん
の精霊がいてね、とても豊かな国なんだよ。だからこの国を手に入れたい国は多いんだ。

それでも、この国は近隣の国との小競り合いから世界を巻き込む戦争までありとあらゆる争いをしては勝っていたんだ。圧倒的な武力を誇る国だつたんだよ、この国は。」

王子様が水が入ったグラスに手を伸ばしげいっと仰ぐ。

（だつた……？）

いぶかしむ私に王子様が話を続ける。

「死滅しはじめたんだ、精霊が。あるとき、急にね。この世界の魔法は、精霊の力を借りて使うものだから、みんなが慌てた。そのときも大きな争いの最中だったからものすごい混乱だつたらしい。それでも、争いは終わらなかつた。むしろクイスピス国が精霊を独占していると、この国に各国の兵が押し寄せてきた。血に酔つていたんだよ。だれにも止められなかつた。そしてその間にも精霊は数を減らしていた。

天候は荒れ、川の水は汚れ、木は枯れる。大地は人々の血で真つ赤に染まつた。そのときになつてやつと人々は自分たちの罪深さが分かつたんだ。悪夢の時代だよ。

そんなとき、世界に強い精気が流れたんだ。瞬間、わずかだけれど精霊の数が増えた。

精気を感じることのできる魔術師たちは探した、希望の光を。でも、誰も見つけられなかつた。

ただ、不定期に精気は流れ、すこしづつ、確実に精霊の数を増やしていった。争いが終わつて世界はひとまず平和になつた。それでも治安はなかなか良くならなくて、いまでスラム^{イージス}が残つているよ。この国では治安の取り締まりに、闇の光という軍団ができるであつといつ間に国家が再建したんだ。そしてそのころ、見つかつたんだ。」

気づけば、目の前には暖かい紅茶が用意されていた。
一口すする。

「国家が再建して3年程経つたころ、王の即位式が行われたんだけど、そこに一人の歌い手が来たんだ。町で評判の異国の歌を歌う黒髪黒目^{イジス}の乙女だった。

女の口から紡ぎだされたのは水の都に住む末姫^{ミツヒメ}が地上の王子に恋をし、魔女と契約をかわし地上へ王子に会いにくるという恋物語だった。人々は女の歌に酔いしれた。世界に精気がながれているのを知らずにね。ただ、幸か不幸かその歌を一人の魔術師が聞いていたから、ようやく精気の源を見つけることができたんだ。

その後女は城に上がり、歌を歌つては精霊の数を増やしていくんだ。

だ。」

そこで王子様が一息つく。

「なるほど、それでこの国は平和になつたんですね。
すごいなその乙女、と感心する。

「それで終わればよかつたのにね。」

と意味深発言を残し王子様はまた話しあじめる。

「君の言つとおり、精霊が増えて世界は平和になつたんだ。けれど、この国は違つた。ひづみができてしまつたんだ。

闇^{イジス}の光のトップである夜の王^{ルノ}が水の都を歌つた乙女を殺したから。皮肉なことに、そのときの夜の王^{ルノ}は王の弟だったんだ。

夜の王は生まれながらにして決まっていて、類まれな能力をもつ人

が必然的になるようになつてゐるんだ。初代夜の王がこの国の闇を消し去るためには有能な人材を、という世界にかけさせた願いや、呪いだつたんだろうね。乙女を殺した夜の王にとつては、

王家という身分に生まれながら、その手で闇を消してゐる自分。なのにこの国は、世界は乙女を必要としているというやるせなさ。乙女が倒れていたのは外の噴水の傍だよ。そしてこれは知つてゐる人は少ないけれど、初めて精気が流れたときの発信源はその噴水なんだ。だから、その乙女は水の都から来たとされてるんだよ。」

ふう、と息をつく王子様。

（なんか……すごく壮大な話……。）

しんみりとこの国の昔話にひたつていると、ふと、思い当たる節があつた。

（乙女の歌つた歌つて人魚姫に似てるなあ……それに噴水つてあれだよね。）

出窓から見えた噴水を思い浮かべる。

…………ちょっとまで！？

「あの、私つて最初どこにいましたか？」

恐る恐る尋ねる。

「噴水の所だけど？」

覚えてるでしょ？といつ王子様。

その辺りの記憶は曖昧なんですよ王子様。
ああ、嫌な予感がする……。

「もしかして、私って……？」

返事を促す聞き方をする。

「乙女なんでしょう？」

あっさりと答える王子様。

でしょ？ ジャないって！ ！

そんなの今ははじめて聞きましたよ！

（……でも、なんで私がここにいるのか分かんないって言ひのは、

その当時の乙女が精霊を増やしたから

私にする事はないって事だよね……。それなら、まあ乙女でも……。）

いつこのいつか帰れるから、と楽観的な思考になりかけたとき、
ある事を思い出した。

（当時の乙女は夜の王に殺されたんだった！ ！）

「あの、闇の光^{イメージス}つてまだあるんですか？」
あせつて尋ねる私に王子様は困ったように頷く。

「うう。でも、今夜の王はそんなことしないだらうし、君が現れた事を知っているのはこの部屋にいる者だけだから安心して。それにはり、さつきの魔よけには結界を張る役目が備わってるから中か

ら開けないかぎり二人以外が部屋に入る事はできないよ。」

「そう安心する情報を教えてくれた王子様に「ありがとうございます。」と感謝を伝え

（結界ナイス！…さつき、メッシュキャラいらない…！…とか思つてないからね？命を守つてくれてありがとう、アントニオ 木…！…）

と魔よけにも感謝する。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5168y/>

水の都の乙女

2011年11月26日16時53分発行